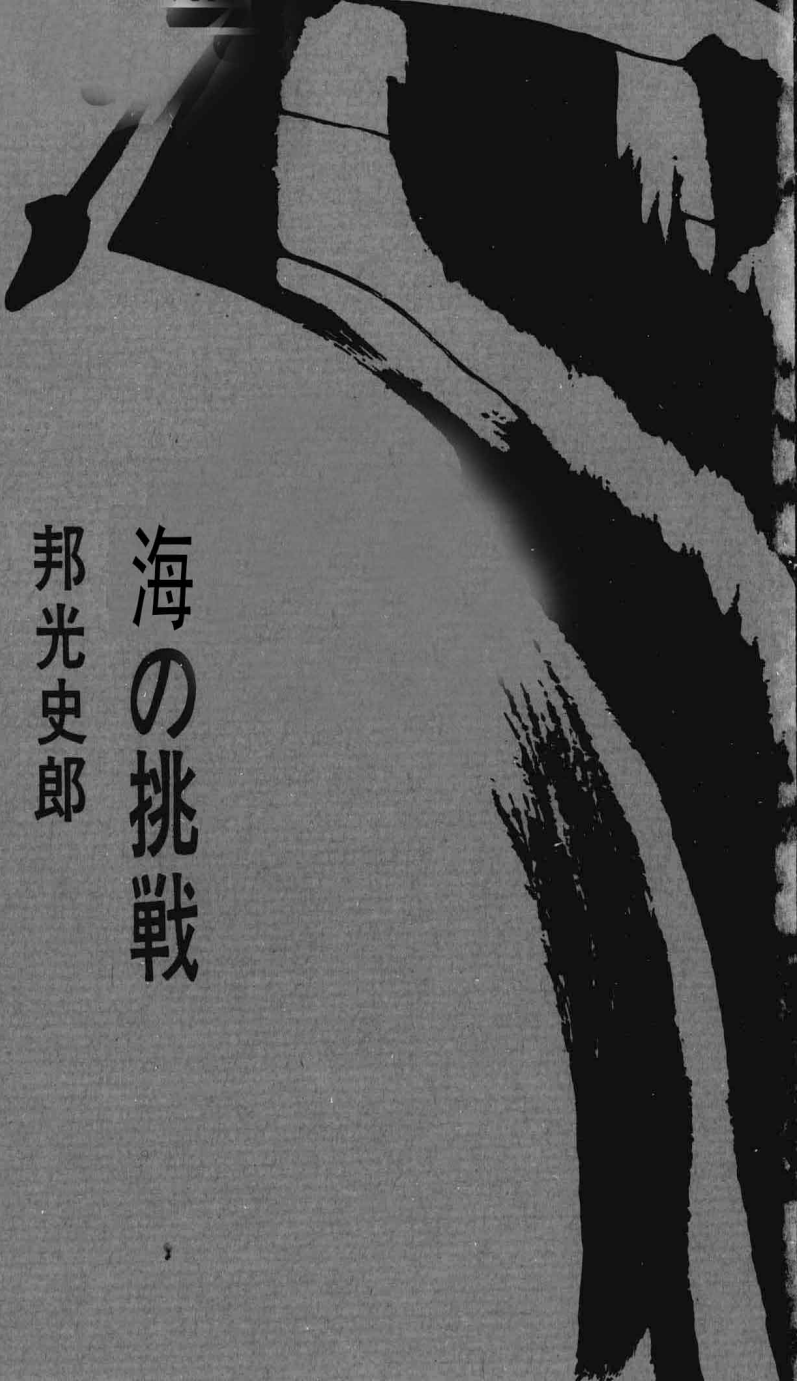


海の挑戦 邦光史郎

海の挑戦



海の挑戦

邦光史郎

講談社

昭和40年5月25日／第1刷発行

■著者／邦光史郎

■発行者／野間省一

印刷所／正興印刷株式会社

東京都板橋区本町41

発行所／株式会社講談社

東京都文京区音羽町3の19

電話／東京〈942〉1111〈大代表

振替／東京3930

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

<製本 株式会社大進堂>

© SHIRO KUNITITU

定価340円

海の挑戦

目次



第一章 海の旅人

8

第二章 虹浜化学

24

第三章 曼珠沙華

46

第四章 夜の炎

66

第五章 足取り

82

第六章 漂海民

104

第七章 光と影

118

第八章 五百二十五島

132

第九章 苦い海

152

第十章 虹の廃墟

174

終章 船上会議

192

海
の
挑
戦

装幀
山内
障

第一章 海の旅人

白っぽい壁に、十号ばかりの油絵が掛っていた。どこか海を描いたものかよくは分らなかったが、波立つ海の風景画であった。

いつからこんなものが、この部屋に掛けていたのだろう。

社長室長杉山真人は、見慣れないものを発見したような不安を抱いた。

室員の誰かを呼んでたずねてみようか。それともこれが会社の備品であるのなら、総務課へ問合わせた方がよいかも知れない。

なんとという色なのか、絵に興味はなかったから、よくは分らないが、緑がかった青い絵具が、みるからに毒々しいほどたっぷり盛り上げられているのだ。

嫌な絵だな。

彼は、疍走った目つきで睨んだ。

我慢し切れなくなつて、立ち上ると、壁に近づいた。

よく見ると、波の上に島が浮んでいるのである。

赤い煉瓦を積み上げた煙突が、島の片隅に描き添えられていて、いかにも荒涼とした光景を呈していた。

どこだろう。

見覚えがあるようであつて、なかなか思い出せなかった。

思い切つて額縁をつかむと、彼は裏蓋をのぞき込んだ。

虹島風景。

薄れた墨書きで、そう記してあつた。

一瞬、毒草をつかんでしまったような恐怖が貫き走つて、彼は立ちすくんだ。

誰がこんなものを、ここへ掛けたのだろう。

だが、動揺はすぐおさまつた。

会社にとって、虹島は決して快い思い出の場所であるとはいえない。

しかし、それも古い記憶になつてしまつた。

誰かが、きつと深い意味もなく、戸棚の奥にしまつてあつたこの絵をとり出して、この壁に掛けたものだろう。

あとで、総務に命じて掛けかえさせておこう。

杉山真人は、自席に戻つた。

供覧のために廻つてきた書類に目を落したが、なんとなく、目の前の絵が、自分ののしかかつてくるように感じられてならない。

誰かを、あすこへ派遣した方がよいかも知れないという気がしてきた。

いきなり卓上電話が鳴り出した。

「専務からです」



交換手の声に、杉山はうなずいた。

「やあ、高原だが……」

女のように甲高い声であった。

「杉山君、ところであの件をどうするね？ 虹浜の連中は、のんびり構えてるようだが、どうも気になってならない」

やはりそう切り込んで来たたと、身構えを直した。

「うちから調査団を出すとなると、いささか大袈裟かも知れんが、用心に越したことはないからなあ」

「専務、私の室員を、誰か出張させて、下調べさせようと考えておりますので、正式の調査は、それからでも遅くはないと思います」

「社長室から出すより、技術関係から出すべきだろうな」
「しかし、あるいは、どこかの妨害事故ということも考えられない訳じゃありませんから、その線の調査が肝心です」

「僕もそう思う。妨害でさえなければ、開業当初の不手際ということで簡単に片づけてしまえることだからね」

「そうですね。なんとなく嫌な予感がするものですから、慎重にしたいと思います。専務、この件は、当分、こちらにお任せ願えませんか」

「そりゃ構わんが、ところで、誰をやるつもりだね」

「ええ。臨海工業地帯に強くて、いく分は技術的なことを留^かっている男といいますと……朝倉はいかがでしょう」

「知らんね。どんな男だ」

「二年ばかり、九州工場に行っておりました朝倉雄二です。まだ独身でして、兄が建設省に勤めております」

「働けそうかね。何分、問題が問題だからな」

「大丈夫だと思います。デスク・ワークよりは、外をとび廻っている方がたのしいという男でして、こういう調査には打ってつけだと思います」

「じゃ、とにかく、やらせてみることにだね」

不満だが、しかたあるまいという響きがこもっていた。しかし、とにかく専務の出足を挫いて一歩先んじたことには変りがない。

杉山は、もう一度受話器を取り上げようとして、ためらった。

果して、あの男が適任だろうか。

難しいところだと思った。

またしても視線が、あの海の絵に向いてしまつて、不安が波立った。

迷い出すときりのないものなのだ。彼は、賭けてみようと思をきめた。

社長室勤務朝倉雄二が、室長室に呼ばれたのは、ちょうど昼休みのために、席を立つとしたところだった。

彼は、やれやれと思った。せめて昼休みだけでものんびり戸外の空気が吸いたかった。とにかくこの部屋では、あ

まり室員たちはしゃべらない。

鬱屈していたのだ。

たえず鉛の帽子を頭にかぶっているようで、重苦しかった。

それぞれに与えられたテーマに従つて、資料を集めたり、レポートを作ったりする作業がつづいた。

ここは人間不在のオフィスなのだ。

しかも、トップ・シークレットの一端を、彼らは委ねられていたから、めったなことを他の社員たちに洩らす訳にはいかない。

気の重い勤務であつた。

別室になっている室長室へ入って行くと、杉山取締役は、まずそうに煙草をふかしていた。

「ねえ君、虹浜へ出張してほしいんだがね」

低い声であつた。

あまり大声を立てない人である。贅肉など一かけらもないだろうと思うほど痩せていた。秘書課長から企画室長、そして新設の社長室長に就任すると同時に、取締役役に選任された。いわば出世コースの最短距離を歩んだ撰り抜きのエリートなのだ。たえず社長の側近に侍っている参謀格の切れ者だという評判は、社員たちに近より難い権力者という印象を与えた。

事実この室長は鋭利な刃物のように頭が切れた。たえず

人より一歩か二歩先を読んでいた。

そのために、協調性を欠くという噂があった。冷めたい、人間味のない機械のような男だと見られていた。

あの人はどこまで行っても懐刀かどうがたなであり参謀であるにすぎない。とても社長になれる器うつわではないと評する者があった。

事実その通りだったろう。

朝倉雄二も、それを感じた。

いや、そんなことは、当人が一番よく知っているにちがいないのだ。

知っていても、人間には、どうにもならないことがある。

扁平足の男に早く走れといったって、無理なことだった。

「そこで、一応、これを読んで研究しておいてほしいんだ」

いく枚かの事故報告書のコピーをわたされた。

朝倉雄二は、久しぶりに本社を離れて出張できると考えただけで、ひどく心が弾んだ。

その期待の方が、任務に対する危惧きけんよりも、ずっと大きかった。

出張できさえすれば、なんでも引受けようという気分です、彼は、浮き浮きと書類を眺めた。

こいつは、まるで旅券パスポートのようじゃないか。

虹浜へついたら、まず第一に、中沢を訪ねてやろう。

瀬戸内海のうまい魚で一杯やるのも悪くはない。

それに、何よりも彼は海が好きだった。

人間なんかには目もくれないで、何千万年か何億万年か知らないが、劫初きせつより現在に至るまで、果てしない干満をくり返している海の営みを、眺めているだけで気が晴れた。

八月の瀬戸内海か。こいつは悪くない贈物だ。

朝倉雄二は、書類を繰っている自分を、眺めるでもなく見守っている上司の目に気づかなかった。

気づいてはいたのだが、いつものことだと気にかけなかったのである。

「どう思うね」

漠然とした感想を求める気怠い声をかけられた。

「ええ室長、かなり事故が連続しているようですね」

いく分警戒して言葉を濁した。

「偶然が重なったものだというんだね」

「だと思えますね。八月五日、虹浜港本航路三号泊地沖百メートル附近で、共和海運株式会社所有のタンカー共和丸、三万五千トンが入港中、航路を横切ろうとしたエンジンつき漁船と接触、共和丸は舵を切りすぎて航路を外れようとした。一方、漁船は沈没した。八月十二日、旭東化学

虹浜工場の海水取水口のバーに廃船の残骸らしきものが附着、そのため冷却水プールが減水して、配管の冷却不能のため一日作業を中止した。八月二十九日、旭東石油精製虹浜工場より敷設した原料パイプの故障によってナフサの噴出事故が発生、ただちに送油を停止して、故障箇所を修理、そのため一日作業を停止した。これが、この報告書の概要だと思えます。それで室長のお考えはどうなんですか」

「そうだね。考えというほどまとまった物はないんだが、もう一つ別のニュースによると、八月三日に、虹浜漁業協同組合では、海水汚染によって魚獲が減ったから、その補償金を出せとさかいで、交渉委員が、虹浜工場へ押しかけている。また、八月十日には、県庁へ陳情デモを行ない、八月十一日には正式文書によって、工場へ補償の件を申入れしている。むろん会社側は、当社の責任ではないといつて正式回答を行なった。それが八月二十七日のことだ。そこで、組合側は、総決起大会を開いて、デモに訴えたことは昨夜のテレビでも報道していたとおりだから、君もよく知っているだろう。これが一つの背景だ」

朝倉雄二は、いくらか表情をひきしめて頷いた。漁民を相手に、刑事の目で、探索しようなんて陰気な作業は、願ひ下げにしたいと考えはじめたのである。

そうでなくとも大資本の圧力に押しひしがれようとしている漁師たちを、これ以上いじめるような仕事はしたくない。

い。

彼は、海へ行けるという浮き立つ気持を、いつか萎えしぼませて、うつそりと室長を眺めていた。

けれど杉山室長は、もう相手の表情の変化になぞ構ってはいなかった。

「ねえ朝倉君、僕はいま君に一つの考えかたを話した。だが、それだけとは限らん。いま産業界は、かつてなかったほどの激しい企業競争を行なっている。互いにマーケットを取り合っているばかりか、企業集団ともいふべき各系列が、互いに相手を叩き潰そうとして、激しい暗闘をくり返している。食うか食われるか。正にそういう疾風怒濤の時代を迎えようとしている。まして、われわれの会社は、後発メーカーだ。生き残るためには同業者を食ってしまわなくてはならん。この事情は相手も同じことだ。どこかで、こっちの足許を浚おうとして、待ち構えている。いま君に対しては、抽象的にしか説明できんが、これが第二の背景だ」

つまり表面上は単純な事故のように見えるが、どこにどんな企みの暗礁がひそんでいるかも知れないというのだ。た。

朝倉雄二は動揺した。

だんだん任務が重荷に感じられてならないのだ。

「だから君に頼みたいのは、これが文字通り偶然の連続であるか、それとも何かそこに作意があつて、事故が引きつ

づいているのかという、その点を、できるだけ詳しくはつきりと確かめてきてほしいのだ」

はじめて室長の視線は、試すように鋭く光り、促すようなきびしきを加えた。

「ただし、表向きは、あくまで現地調査なのだから、それ以上の態度を、相手に示してはならない。傘下系列下にある会社に対して、親会社が査察にきた。それが君の任務だが、相手に威圧感を与える訳にはいかん。単なる事故かもしれないからね。厄介だといえば、その辺の兼ね合いが難しがるうね」

そう聞くと、朝倉にもようやく自分が扱われた理由が分りかけてきた。つまり、これは一種の予備調査なのだ。そうでなければ、経験の浅い平社員である自分に、こんな重要な任務が与えられようはずはない。

「では、できるかぎり調べて参ります」

もしこの出張を断ってしまったなら、当分外の空気を吸う機会はなくなるだろうし、無能者のレッテルを貼られかねない。そういう直感がすぐ働いた。

「しかし室長、調査の限界は、単なる事故か、それとも誰かの妨害によって起った事故かという、その点をたしかめてくるだけでよろしいのでしょうか？」

もし妨害事故だと判明して、その犯人の追及を課せられたなら、それこそ大変だ。そんな仕事は警察官のすること

であって、民間企業の社員の手之余ると、前もって予防線を張っておいたのだ。

「もちろんだよ」

軽く室長は答えて、大きく頷いた。

「では、出張して参ります」

それなら引受けようと思った。なんとなく瀬戸内海の潮風が身近になったようで、旅への期待がまた大きくふくらんできた。

「じゃ、早速、明日出発してもらおう。期間は一応十日間、君はたしか独身だったね」

社長室勤務の社員で、独身なのは、自分と平沼の二人だけだったと、彼は思い出した。

なるほど、ここにも扱われた理由がある。

「ところで、これは、正規の旅費とは別途の費用として、君に渡しておく」

白いハートン封筒を室長は机の抽出から取り出した。

かなり部厚い。一体いくら入っているのだろうか、気になってしかたなかった。

「その十万円は、どう使おうと、君の自由裁量に委せよう」

室長は、朝倉の気持を察したようだった。

しかし、出張旅費をできるだけ抑えようという会社にしては、ひどく珍しいことだったから、朝倉はまた新しい危

惧を覚えた。

にわかに受取ることが気重くなったのである。

「なお、必要があれば、いつでも直接僕に請求してくれたまえ」

そう言われると一層不安が兆した。

「どうしたんだね？ まさか十万円ぐらい無駄使いしたからといって、会社の土台が揺らぎはせんよ」

ほんの冗談として、杉山室長は、会社の土台が揺らぐと口にした。

だが、その言葉は、旭東産業の社長九鬼鉄兵の受け売りであり、口真似だった。

戦前、わずかな銅山をもつ一鉱業会社にすぎなかった旭東鉱業を、現在傘下系列十一の子会社を擁する資本金百二十億円の大手企業にまで盛り立てた功労者であり、一介の製錬所長から、旭東産業の総帥の地位にまでのし上った九鬼鉄兵は、何か冒険を企てるたびに、不安を訴える重役たち、こう言った。

『それ位のことでは会社の土台が揺らぎはせんよ』

その一言で、取締役会をリードしてきたのである。

杉山真人は、なんとなく割り切れない面持ちで自分の前に佇んでいる若い社員朝倉雄二をみつめた。

しっかりするんだ。わしはお前にチャンスを与えてやった。その細い糸口は、しっかりたぐりよせたなら、どんな

に太い昇進のロープとなって、手許に戻ってくるかもしれない。

だが、それには絶体絶命といってよいほどの危険がつきまとう。その十万円は、いわば危険手当なのだ。

だからどう使おうと、干渉はしない。

もしわしならその十万円で大名旅行をしてくるかも知れない。女とふたりで一週間、温泉に漬って、会社へは適当な報告をしておく。

その方が、ずっと安全な道であるかも知れないのだ。

この男に、そこまでの察しがつくかどうかと、杉山は、見きわめようとした。

一一

九月一日、朝倉は、特急第一富士で西へ向った。

岡山着、午後四時四十二分、ここで一たん特急を下りると、各駅停車の国電に乗りかえた。

日曜日だったので、車内はすいていた。

窓の外に、備前岡山の美田がどこまでも果てしなく拡がっていた。

生暖かい風に葉裏をひるがえしている稲田を眺めていると、うとうとしてきた。

なんといつても旅ほど心のくつろぐものはない。